

猫蓑通信

第 84号
平成 23年
(2011年)
7月15日発行
(年4回発行)

連句の鑑賞

青木秀樹

このところ個人の俳句集をいただくことが多い。私の交際関係は主に連句の世界の方なので、その方が一方で俳句を熱心になさっていることがわかる。それに対して個人の名で連句集を上梓される方は詩人でもある鈴木漠氏以外ほとんどいないのが現状である。多くの連句集は結社やグループなど団体名で刊行されている。このことから座の文芸の連句と個人的な文芸の俳句の相異が明らかになっている。

連句協会では毎年刊行する『連句年鑑』に全国の連句グループの作品二百巻余を掲載、国民文化祭では当日作品や募吟入賞作品集を刊行、またいくつもの県連句協会や比較的大きな結社やグループでも年間作品集を作成している。

連句作品を手控えに記したままにすればその人一代のもので終り、活字にして残すことで後世に作品を伝えることができる可能性を生む。『猫蓑作品集』は紙面の関係により捌き一人につき一巻に制限せざるを得ないが、より良い作品を記録として残すことをも意図している。

現代の連句人は他人の作品を読まないという

説があり、したがって連句鑑賞がまっとうにされないことが危惧されている。連句の鑑賞法が整理・確立されることを望む声は識者を中心に根強いものがあるが、残念ながら連句実作者の中でまだ本気で取り組む機運は熟していない。

東日本大震災の後遺症で鬱々としている頃、『猫蓑作品集』創刊号と第二号を読んだ。猫蓑会創立から約十年、先輩たちが初心の域を抜け連句に意欲的に取り組んでいる頃の作品がずらりと並んでいる。未熟な部分もあるが、捌きと連衆の詩心がぶつかり合う面白い付け合いが随所にある。そのいくつかを再録しようと思う。

鷗をみれば思ひ出すひと

遊

軟らかな飯が好みと炊いてくれ

篤子

だらだら坂を降りきつた家

哲

(歌仙「秋祭」式田和子捌)

柚子湯よりすっぽんぼんの嬰渡し

清子

鍋の用意の整ひし月

郁子

胸算用すれど儂き円下落

徒司

(歌仙「すぼんぼ」杉内徒司捌)

じれったいのは朝の連ドラ

良子

この頃はダンス教室命の恋

郁子

後生だいに卵にんにく

杉亭

(歌仙「初東風の」加藤道子捌)
公爵夫人おあひては誰
淑子
禁断の掟をくぐる僧の恋
正子
たかが奈良漬酔ふは小心
和子

(歌仙「初蟬の」蒲原志げ子捌)
ねずみもち黒き実垂れて御師の家
遊
ぬらりひよん出る蕪村忌の宵
明雅

愁ひつつおもきおのどの抱きごころ
正江
(歌仙「石路咲くや」下坂元子捌)

炬燵の中でサインする脚
隆秀
雪を来てわたくしはもうとろけさう
千町

深き吐息に重文の匣
隆秀
(歌仙「武蔵野の」両吟)

定家の忌京もはづれの古き寺
元子
お蔵ぐるみで道具買ふなり
孝子

いま怖いぎっくり腰と前立腺
好敏
(二十韻「幣辛夷」膝おくり)

●目次●

●目次●
●目次●

●目次●
●目次●

●目次●
●目次●

●目次●
●目次●

●目次●
●目次●

●目次●
●目次●

●目次●
●目次●

●目次●
●目次●

●目次●
●目次●

●目次●
●目次●

亀戸神社と連歌所 〈南柏雑記 15〉

東明雅

昭和六十二年（一九八七）年六月一日発行

『季刊連句』第十七号より転載

亀戸天神は、寛文初年（一六六一）に太宰府天神から奉遷されたものであり、そのころは東連歌所・西連歌所の二つの建物があったて、將軍（家綱）も立ち寄ったという。その後、享保（二七一六〜一七三五）のころまでは存在したが、火事で消失したらしく、西連歌所のみが明和元年（一七六四）再建され、これも大破して、寛政十二年（一八〇〇）再び建てられた。この間、菅公の八百年忌・九百年忌には、特別に千句連歌が興行された外、年中行事としては、正月二日に裏白連歌神事（懐紙の表ばかり八句の連歌）、七月七日には和歌・連歌の神事、九月十三日には連歌の神事が行なわれ、また、毎月二十五日には月次の連歌会が催されたのである。

その作品も残って、懐紙の一部は整理され、「亀戸天満宮史料集」（昭和五十二年刊）に掲載されている。

さて、その西連歌所は寛政十二年の地図によれば、瓊門（中門）の前の池に架った三の橋の西側にちゃんと記されているが、寛政十三年の朱印絵図面には記載されていない。これはこの年御開帳があった為、その場所が葭簣張の水茶

屋になつてゐるようである。水茶屋とは路傍や境内でお茶を飲ませる茶屋のことだが、せつかくの連歌所は毀されたのか。勿体ない話だが、これは、一つには当時の連歌の衰微ぶりを物語るものである。幕府では流石に、正月の吉例として、いわゆる柳営連歌を幕末まで残存していたけれども、それは一般の庶民とは何の関係もないものとなつていた。俳諧・雑俳が庶民の人気をよんでゐた時代に、いくらその俳諧や雑俳の祖ともいふべき連歌の神様が天神様であると言つても、庶民を説得できなくなつたのである。

そう言えば、全国の天神様のうち、連歌道で最も権威のあつたのは、京都の北野天神で、すでに十四世紀末ごろから、干句・万句の興行がなされ、はじめは社坊公文所、続いて松梅院で興行され、その長を北野連歌会所奉行、あるいは宗匠と呼び、連歌界のオーソリティーとなつたのである。この北野の連歌会所がどうなつてゐるか、確かめてはいないけれども、すくなくとも、正式の連歌のできる方が殆んどない今日では、たとえ建物は残つてゐるとしても、有名無実のものであり、おそらくは、北野神社も、昨今の受験ブームのあおりをうけて、合格祈願の絵馬で埋まつてゐることだろう。神様であつても浮世の転変は避けられないとすれば、まして凡人は、亀戸天神の池畔に咲きほこる藤波の美しさに、一時の鬱を散ずるのも神の功德であるう。

第一回亀戸天神社藤祭奉納正式俳諧
俳諧之連歌二十韻

澤東や鎮めの宮の藤祭り	武司
鯉悠々とうららかな池	正江
凧作る多くの仲間集りて	篤子
咽喉うるほす紅茶一杯	正雄
ウ 湯上りの肌を照らして月涼し	麻子
擦りよるものは蛇の化身か	貞子
オフィスでは評判のよきタイピスト	孝子
濤の彼方に白き灯台	天留子
大島の山の噴火も時に見え	徒司
ジョギングにまで蹤いてくる犬	久美子
ナオ獵人の獲物も年々減るばかり	啓世
杜氏迎へてきりたんぼなど	あかり
北国の女の情にほだされて	東夷
踊浴衣の派手な染柄	彬風
満月の空にうすうす雲遊ぶ	みき
幼児の籠逃ぐるきちきち	淳子
ナウ道端の屋台に何の人だかり	遊
放送局のビデオ車が着き	隆秀
新しき文臺花に使ひ初め	明雅
霞の中に望む名所	執筆

昭和六十二年四月二十五日 首尾

猫養会は昭和六十二年に亀戸天神社で正式俳諧を興行し（宗匠 東明雅・執筆 中川哲、右の二十韻を奉納。以来、今年で二十五回になりました。第二十五回奉納作品は六ページに。

1・雛菊の座

二十韻「亀の鳴く」

坂本孝子 捌

菅公のみづらに聴くや亀の鳴く
孝子
少しほころぶ反り橋の藤
芙美
蓬餅まづは転居の近付きに
有子
犬の頭を撫でて出勤
龍一
祈ることやたらに多き夏の月
政治
カザフスタンの青き薫風
芙美
懐に握るルビーの短刀を
有
質屋で暴くもと彼の嘘
一
幸せな暮らしに回す洗濯機
芙美
未曾有の津波すべて呑み込む
志
ナオ 鰯起し竹人形の目が動く
一
千鳥足なり着ぶくれの影
同
善良で欠点だらけの父であり
有
待つのは得意恋になるまで
芙美
月の出の二人で乗った観覧車
一
香具師の啖呵に秋の立つ頃
有
ナウ 奥山に小牡鹿呼ぶか故郷は
志
子供集めてフットサルなど
孝
バイク便運ぶ落花と明日の夢
芙美
朧の辻に灯る銭湯
有

連衆 間瀬芙美 佐々木有子 松澤龍一
峯田政志

2・山董の座

二十韻「時代は変わる」

倉本路子 捌

ゆく春や時代は変わる音たてて
路子
袱紗捌きぬ炬塞の頃
明子
子供らは果箱をかける朗かに
壽子
けふは見学あすはパーティー
妙子
スカイツリークレーンの先夏の月
豊美
おそろおそろに脱ぎし羅
かりん
隠し黒子ありか知ってる君と僕
あい子
もう満腹でおかはりはなし
壽
小津映画フランス人の好みにて
ん
ノートルダムノートルダムの鐘が微かに
明
ナオ 暖炉燃ゆ祖父の話は獵自慢
同
古日記には戦争のこと
豊
どもならんやめてちようだあたやあもにあ
壽
吉乃きよのの家うちに信長の駕籠
あ
天空に星の契りは深まりて
豊
口説かれ上手な女むすめと月の夜
路
ナウ 今年酒酔へば酔ふほど饒舌に
豊
綿の合着をユニクロで買ひ
妙
花びらは光となりて風に舞ふ
壽
車そろそろ雛の街道
ん

連衆 野口明子 杉山壽子 篠原妙子
高橋豊美 登坂かりん 鈴木あい子
ナオ三 ※IIそんな大変な

3・鼓草の座

二十韻「安堵」

吉田醉山 捌

藤垂るるけふ一日の安堵かな
醉山
のどかに響く子らの歌声
泉子
シャボン玉高き垣根を超えゆきて
良子
部下連れ帰り囲む食卓
志世子
覗き込む終相場は月を背に
忠史
舞鯛のやうな女現れ
良
降臨の神は妹の方選び
史
ウチの亭主はホンに良い人
泉
プードルを連れていつもの散歩道
世
千尋丈の堀のある城
良
ナオ 年老いた毒消売が戸を叩き
史
浴衣のひとは泊めてやらない
良
惚れたなら枷をはづして飛んで来な
泉
火照る体を眠らせる酒
山
望の月スイスアルプス稜線に
世
Vの字への字渡るかりがね
史
ナウ 御命講団扇太鼓を振立てて
良
菘くゆらすお茶の先生
泉
花溢れ見事決めたるカズダンス
史
夢のまにまに黄蝶白蝶
世

連衆 青木泉水 本屋良子 秋山志世子
根津忠史

4・花簪の座

二十韻「藤の香りの」 長坂節子 捌

参道に藤の香りのあふれけり 節子
追ひつ追はれつ黄蝶白蝶 實
磯遊びむづかる嬰を抱き上げて 恭子
五目いなりを作る楽しみ カンナ
ウ ゲレンデにぼっかり浮かぶ大き月 要子
狸寝入りの彼にちよつかい 恭
薄眼あげ指をからめてほほゑんで 實
電動自転車買ひ換へる頃 要
被災地でがんばれだけの総理をり 恭
毎日続く親子マラソン ナ
ナオ むくむくと忽ち現るる雲の峰 實
墓のため息縁の下より ナ
港町いくつさまよふ恋の旅 恭
ひとと寄り添ふやや寒の肌 節
悪女とも嬢嬢ともなる若き妻 恭
あのこづちつけけふも猫くる 要
ナウ 枝折戸を開けて四方山話など ナ
銘柄とはず交はず盃 節
大川に散りたる花はまぼろしか ナ
オカリナを吹くのどちらかな午後 要

連衆 梅田實 式田恭子 山片カンナ
山本要子

5・春蘭の座

二十韻「藤の香」 武井雅子 捌

藤の香をまとひ渡るや太鼓橋 雅子
春のシヨールを風になびかせ 央子
大掃除予定表にも書かれぬて 常義
寝そべり並ぶ子犬親犬 郁子
ウ 夏の宵粋な若衆に月も酔ひ 葵
男山よき早乙女の酌 央
転勤の歓迎会でひとめ惚れ 義
裏の林に珍しき鳥 郁
テンガロンハットはアメリカ土産にて 義
野球少年夢はイチロー 郁
ナオ 凍道に自転車影くつきりと 葵
鬱になるまで冬籠りして 央
縦のものせつせと横にする亭主 葵
夜長妻にて半世紀過ぎ 郁
後の月黒潮滔と室戸沖 義
秋の遍路の杖を置く宿 雅
ナウ 多国籍料理は人気バイキング 葵
旧知の友とぼったりと遭ひ 郁
花大樹いのちの限り咲き誇り 央
色淡き野に揺るる陽炎 義

連衆 遠藤央子 生田日常義 東 郁子
石川 葵
ウ二 ※II気仙沼の銘酒

6・苧環の座

二十韻「撫牛の」 鈴木了斎 捌

大災害により藤祭中止とて
撫牛の声なく吼ゆる穀雨かな 了斎
小風にふるへ若き藤房 美奈子
春コート衿にステッチあしらひて わこ
コンビの靴を下ろす日曜 敬子
ウ 月影を遊ばせてゐる金魚玉 奈
裸身の泳ぐやうな青蚊帳 斎
忘れぬ下げ髪匂ふ島の娘を 敬
ちよいとだましたつもりだったが こ
札入れの福沢諭吉薄笑ひ 斎
緊縮の明日ばらまきの今日 奈
ナオ 軽トラに乗つて越後の杜氏来る こ
通し燕と過ぐすひと冬 敬
瘦せたのはあなたのせいとうつむいて 奈
吐息溜息恋のこぼるる 斎
浜菊の黄がぼつぼつと月に咲き 敬
かの世の坂に閻魔蟋蟀 こ
ナウ やや寒の庵に座りてただひとり 斎
ふらんす装の詩集繙く 奈
花吹雪いまこの場所がエルドラド こ
絵風を引いて駆ける少年 敬

連衆 鈴木美奈子 横山わこ 須賀敬子

7・桜草の座

二十韻「弥栄に」

内田遊民 捌

弥栄に満ちる藤の香天神社 遊民
 スカイツリーも東風の借景 アンズ
 大皿をはみ出す眼張盛り付けて 佳之子
 年に三度は家族団欒 泉美
 夏の月島から島へ渡り行き 秀樹
 ハンモックには睡るマドンナ 泉
 解読す古代文字の愛の詩 ア
 鎖骨をなぞる熱きくちびる 泉
 キジ猫がお礼に鳩を唾へ来た ア
 城山までの長い坂道 樹
 ナオ 顔見世の跳ねて浅酌先斗町 之
 とろけるやうな芋棒の芋 同
 異国語の交じる会話の遅々として 樹
 展示ケースに三彩の馬 之
 月今宵胡弓弾くのは誰ならん 同
 秋草の野に夢のざわさわ ア
 ナウ 遠近に怪獣めいた稲架のあり 樹
 特急通過待ち合はす駅 ア
 ひらひらと我がみちのくの花吹雪 泉
 心と心繋ぐ春暖 ア

連衆 松島アンズ 染谷佳之子 金子泉美
 青木秀樹

8・野薔の座

二十韻「図柄そのまま」

高山鄭和 捌

百景の図柄そのまま藤の房 鄭和
 そり橋渡りつどふ春装 碧
 聞こえ来る歌詠鳥に和みぬて 文子
 時折めざめ伸びをする嬰 美代子
 小屋の小さき窓に昇る月 鐵男
 雷のたびびたと肌寄せ 代
 まかしてよ慄へながらも抱きしめる 碧
 嫉妬やぎの猫はその辺 文
 嘶家に弟子入り一年庭掃除 同
 テームズ河で破門状読む 同
 ナオ 漱石がくしやみしてゐる下宿先 同
 雪合戦のひびく喚声 代
 艶話辻の地蔵に聞かれたか 文
 松茸山を形に身請けを 碧
 月影にすすり泣きする人の妻 代
 かすかに揺るる蓑虫の糸 文
 ナウ この村の境界の線どう書かう 男
 ワイン携へ避難所へ行く 碧
 未来信じ爛漫の花咲かせなむ 文
 でこぼんのあるうらかな昼 執筆

連衆 松本 碧 橘 文子 山田美代子
 林 鐵男

9・花菜の座

二十韻「角髪かほど」

松原昭 捌

菅公の角髪がほどの藤の房 昭
 筆塚撫でて渡りゆく東風 千恵子
 雀の子学長秘書が育てぬて 曉巳
 昼の定食今日は何かな 淳子
 白き月スニーカーには染みひとつ 一枝
 だらだら祭タンDEMで行く 曉
 手を握り誘ふ安曇野秋麗 淳
 弓引く彼の顔の凛々しき 千
 飴玉のこのすつばさが懐しく 淳
 チンチン電車過ぎる下町 曉
 ナオ かけ流し湯をあふれしめ漱石忌 淳
 樹氷の先の月を指さす 千
 液晶の株価表示に留める足 枝
 やはり女はきまぐれがよし 曉
 野暮な奴嫌ひが好きと分らない 淳
 アイスクリーム溶けてしまった 枝
 ナウ なまけもの時速七〇〇メートルで 千
 がき大将は渾名名人 同
 岬なる分教場の花の宴 同
 両手に余る蜷や浅蜷や 枝

連衆 上月淳子 島村曉巳 鈴木千恵子
 西田一枝

亀戸天神社奉納正式俳諧とその後の二十韻実作会は、例年、亀戸天神社藤祭の行事の一つとして開催されてきましたが、平成二十三年は東日本大震災の被災状況に鑑みて藤祭の開催が中止となり、個別の奉納行事としての開催となりました。

平成二十三年四月二十一日
 於 亀戸天神社

俳諧之連歌二十韻

廣重の図会にも勝るけふの藤

朱の橋渡る亀の鳴く頃

のどらかさお伽噺を子に説いて

眠気覚ましにガムを進上

冬山の月に行く手の登頂路

紆余曲折の恋の果てには

後ろからそつと寄り添ふ左棲

和尚ひねもす盃を傾け

帰り鳩脚の筒には密書あり

風の死すとき舳ふ島陰

ナオ汗しとど超満員のバスゆれて

父と銭湯行くが楽しみ

牛乳は売り切れました柵の札

キューピッド射るちくり金の矢

告白を盗み聞く月鏡窓

庭の熟柿に触れぬ用心

ナウ半生の行き交ふ記憶秋惜しむ

東西東西キヤッツ開幕

瓦礫の地常に変はらぬ花よ咲け

足裏にしかと晩霜の道

秀樹

淳子

千町

實

了齋

千恵子

たつみ

節子

恭子

わこ

壽子

明子

忠史

有子

ふみ

一枝

遊民

アンズ

文字

執筆

平成二十三年四月二十一日 首尾

於 亀戸天神社

猫養会では十月の芭蕉忌・明雅忌、四月の亀戸天神社奉納に正式俳諧を興行し、この二回を同じ宗匠、執筆が務めます。

先人の大きさを実感

正式俳諧の執筆を終えて

林 鐵男

正式俳諧は近世から現代までを通貫する様式の総合芸能である。立花、香道、配硯の立居および執筆の所作、吟声、懐紙への記帳、綴合などにおいて日本の伝統的な芸能の多くの特徴を包摂する。

役割の面で見れば能楽においてシテを演ずる者は地謡を勤めることは勿論、大鼓、能管、鼓をも素養として学ぶが、舞台でシテ方がワキを演ずることはなくその逆もありえない。これに反して正式俳諧の場合は回数を重ねれば全ての役を引き受けることもなる。その意味では、役をひとわり経験すれば正式俳諧の構想とその全体の流れが見えて来る筈であり、真剣に取組めば次第にオールラウンドプレーヤーの能力を獲得していくことになる。

執筆の座に座ると一座の連衆の動きが意外によく見えてくる。次の付役が準備をして短冊をさぐるうとする手の動き、声を出すための咳払いなど、やはり執筆であることの緊張が一座の展開を把握しようとい心活性化させてくる。

執筆の所作は修練を重ねることにより身体がひとりでにその動きを始めるものといわれる。この場合でも熱が入りすぎ演じようとする意欲が強くと出る傍目からは不自然なかたちとなる。省みれば秋の芭蕉忌、春の亀戸天神社祭と



二度の執筆の役をつとめたが、心身融合したこの境地には至らず、「せぬならではでであるまじ(世阿弥)」の真言には途轍もなく遠い。

普段の行住のかたちの次元から設計された様式のおよぶまで、どこでどのようにその関をこえるのか、この基準は己のバランス感覚と絶えざる自問の心機であろう。この問いの相手はといえば、例えばゴルフのプレーにおいてラウンド中に心底にあるのはオールドマンパーであるとされる。さすれば正式俳諧におけるオールドマンパーは芭蕉と明雅先生の存在ということになるうか。

自分にとって正式俳諧の成果はこの二人の大きさを実感したことであり、この連山を遠く眺観した今回の役であった。

亀戸天神社懐紙奉納直会興行

平成二十三年五月十七日
於 錦糸町駅ヒル不一家

亀戸天神社奉納正式俳諧作品(前ページ)と、同日の亀戸天神社興行の各作品(3と5ページ)は、伝統的な懐紙に古式に則って墨書し、水引にて綴じたものを約一ヶ月後に同社に奉納します。懐紙奉納当日の神事、直会の後、正式俳諧の宗匠、執筆、奉納各巻の捌が集まって数巻の二十韻を巻くのが恒例です。

二十韻「欄宜の袂」

坂本孝子 捌

祝詞よむ欄宜の袂や風薫る 孝子
葉柳かかる橋のをちこち 恭子
出航の吃水深く波分けて 鐵男
フランベ立てる鍋の焼き色 孝
月円か御伽噺を読みきかせ 恭
ばったは長い脚をじゃまとし 男
十八の秋は少女の初舞台 孝
あの人この人きつとライバル 恭
後朝はルージュののりがいまひとつ 男
指先舐めて伝票を繰る 孝
ナオ 寒禽の枝に紛るる大櫛 恭
僧の宿乞ふ雪原の月 孝
訣別の一首を遺し学徒兵 男
契つてもまた契つても愛 恭
ジンファイズ薔薇色の夢甦り 孝
投げ矢がハート狙ふ戯れ 男
ナウ C Mの父親役は秋田犬 恭
山の水引きひたす種粉 孝
花びらを寄せて集めてお持て成し 男
まっすぐ上がる一文字風 執筆

連衆 式田恭子 林 鐵男

二十韻「樟若葉」

武井雅子 捌

奉納を終へし社や樟若葉 雅子
更衣して渡る朱の橋 文字
ティーパーティー隣のピアノ聞えきて 酔山
シヨートケーキはチョコがたっぷり 鄭和
山上を端正の月照すらん 文
秋狂言に噫び泣く女 雅
蟻螂に咬まれし痕と艶な嘘 和
デコメで送る逢引の場所 山
ドーヴァアの彼方遙かにアルピオン 雅
両替要らぬ旅を満喫 文
ナオ 口々に囁を見たと興奮し 山
雲に姿を隠す凍月 和
宰相の決断原発停止する 文
術なき時は念仏三昧 雅
信じてた切れぬと云った赤い糸 和
去りにし君の部屋に残り香 山
ナウ 志夢多き日の懐かしく 雅
乳母車の嬰子雀を呼ぶ 文
スマッシュでアドバンテージ花吹雪 山
酒酌み交すうらかな午後 和

連衆 橋 文字 吉田酔山 高山鄭和

二十韻「梅鉢紋の」

鈴木了齋 捌

はえに乗る梅鉢紋の太鼓かな 路子
夏めく池にすくと立つ鷺 遊民
曳く馬の手綱少々ゆるませて 昭
煙管の火皿たたくてのひら 了齋
妹背山古人愛でたる月今も 路
これは夜這かいえ星合 齋
美男葛葉りて君に本を貸す 民
国境抜ける長きトンネル 路
ノルマンディー戦はすでに夢の如 同
安酒を買ふ暗き自販機 昭
ナオ 銭湯へ通ふ下駄音からからと 民
注染ぞめの手拭の柄 路
寒月の照らす名園銀沙灘 民
格安ツアー着ぶくれて行く 昭
かの人に届けと長き長き文 民
籍は入れない老いらくの恋 昭
丈六の弥陀の半眼仰ぎ見て 民
ナウ 句帳片手に陽炎の道 路
まろび行く地表の花は波の如 齋
春潮ゆらと美しき瀬戸内 昭

連衆 倉本路子 内田遊民 松原昭

松山市文化協会会長賞

歌仙「頬打つ雪」

野口明子 捌

痛きほど頬打つ雪や日本海

野口明子
染谷佳之

鮪起し鳴る黒雲の中

新作のマジック皆に披露して

靱のどこに鍵はあるやら

月光に芯まで冷ゆる登り窯

おすそわけにと配る自然薯

太棹の糸をきりりと冬隣

浮気な奴と知らず入れあげ

一生をまかせてくれと言はれても

夜明けとなるかチュニジアの乱

地続きの国境越ゆるカメラマン

さうは見えない孫の似顔絵

桐箱に並ぶ鋏形兜虫

御輿揉みある空に昼月

在方はいとこほとこがぞろぞろと

血液型をまたも聞かれる

散る花の影よぎりたる香合せ

東風やはらかく吹きし里山

家出する所も無くて放哉忌

裁縫道具あの頃のまま

迷惑な社長のエールきりもなし

勸められたる株で大損
まつすぐに挿す他はなく野水仙

明 之

スキーはづしてしばし休憩
部屋番号書かれし紙を渡されて
噂広まり引けぬ関係

憧れのシロガネーゼはこんなもの

支流集めて大河ながるる

僧院の回廊照らす望の月

芸術祭に送る作品

ナウからすみを炙りつつ酒酌み交し

老眼鏡をちよいと拝借

通勤はロマンズカーで楽々と

エコと云はれて売れる自転車

賑やかに鳩の集まる花の下

しゃぼん玉へと吹き込みし夢

執筆

平成二十三年一月二十二日 起首

同二十四日 満尾 於 金沢白鳥路ホテル

伊予柑

野口明子

羽田から約一時間半、眼下に瀬戸内の島々が見えて来た。晩春の海はダイヤモンドが散らばったように輝き、船の水脈がまるで流れ星の美しさで、旅の期待が弥が上にも膨らんで行く。

夜の懇親会まで時間があるので、市電でのんびりと町を巡った。ガイドブックを見て悩んでいると、地元の方が気軽に声をかけて下さる。実にタイミングよく、話も優しく的確で、心遣いの素晴らしさに驚いたのであった。懇親会で俵

口連句会副会長の戒能多喜様とご同席させていただいたので、その話をし、とても感動したことをお伝えした。松山の方々は今からお遍路さんに対しておもてなしの心があり、今でもその気持は変わらず旅人に親切なのだとい、またひとしきり感銘したのである。

翌日の四月二十九日、いよいよ大会が始まった。主催者挨拶や祝辞、表彰式の後、連句協会顧問の磯直道様のご講演『不易流行』を伺う。

三冊子等で読む時とはまた違い、現代の連句を例にあげて丁寧に教えていただき、自分の連句に対する心構えを、もう一度考えようい機会を与えていただいたように思った。

お弁当をいただきながら、アトラクションで、伊予節・宇和島さんさ、伊予漫才を堪能した後、いよいよ実作が始まった。本来俵口では歌仙なのだが、時間の関係で今回は半歌仙でも……との事で、私達の「十里香」の席は半歌仙となった。珍しい席名だったので松山の向井由利子様に向ったところ、「松山の市花は椿なので席名はすべて椿の名」だそうで、凝った席名に改めて感心した。ご連衆様のおかげで恙無く進んだが、富山の杉本聰様から「半歌仙なのだから四季を入れたらどうか」とご提案があった。

初めてだが、それも一興と挑戦してみたところ、さりげなく冬を入れる事が出来て、とても面白い巻になったと思う。

土産に頂戴した伊予柑を帰りの機内でいただいた。甘くておいしかったのだが、楽しかった時間を思い出して鼻の奥がツーンとした。

十五周年記念大会特別賞

歌仙 賦百人一首 「千年の」 倉本路子 捌

千年の歴史は深し歌歌留多 倉本路子
 けふ九重に福寿草咲く 遠藤央子
 受験生夢の通ひ路ひたすらに 武井敦子
 遅日のデイスコ人知られで 松原昭
 有明の月を背にして畑を打つ 央
 いまひとたびの蓑一服 敦
 撤去せし富士の高嶺の測候所 路
 身のいたづらになる程に惚れ 央
 そのままに寝なましものを戻り来て 同
 なほ恨めしき忘れじの君 昭
 滝の音木霊をはしくトレモロか 敦
 寂しさに耐へ総持寺の行 央
 天の原ふりさけみたるけふの月 昭
 雄島の蟹と新走り酌む 央
 思ひわび北への旅を乗り継ぎて 敦
 隣席のひとつれなかりけり 昭
 花の色は薄墨尾根の江戸彼岸 央
 外山の霞打ち払はるる 昭
 ナオモンサンミッシェル濡れにぞ濡れて鐘おぼろ 同
 行方も知らぬ拉致の同胞 路
 思ひ悩み人にはつげず引籠り 同
 神のまにまに飛べよ絨緞 敦
 はやぶさは道遠けれどイトカワへ 昭

平成二十三年四月二十九日
 松山市男女共同参画推進センターにて開催

与党の運命難き行末

奈落へも待つとし聞かば尋めゆかむ 昭
 一からくれなゐの涙しぼりて 央
 さつぱりと独りかも寝む大広間 昭
 ゲゲゲの妻と人はいふなり 路
 逃ぐるが勝ソマリア沖の月の影 敦
 わが袖の下見せむ松茸 央
 ナウ一山の紅葉の錦濃く淡く 昭
 いつみきとてかこの老の皺 央
 くらぶればお国自慢のあれやこれ 敦
 ひとをも身をも誉むることよき 央
 幾億の花びらならむにほひぬる 路
 都の辰巳駆ける春駒 昭

平成二十三年一月八日 首尾
 於 新宿区角筈地域センター

俵口賞

歌仙「行合の」

鈴木了齋 捌

行合の空吹く風の高さかな 御園魚彦
 港に滯の残る有明 鈴木了齋
 盆踊まづは櫓を立ち上げて 式田恭子
 生成り木綿の普段着のまま 山崎理寸
 寝ころべば新草の香の胸に満つ 斎
 並んで餌をねだる子雀 彦
 ほんのりと早めに灯る遍路宿 寸
 恋の懺悔を書き綴る文 恭
 夢に逢ひ覚めておどろく肘枕 彦

齋王の坐す杜の深さよ

雪やんでくつきり昇る尾根の月 恭
 鼻吸りあげ灰猫を抱く 寸
 フェルマーの定理解法ひらめいて 斎
 整ひましたと解いた謎かけ 彦
 欲得の子孫の嘘で百余歳 寸
 洗濯物が干されたるまま 恭
 初花の若木ながらに色の濃き 彦
 雛遊びの止まぬおしやべり 斎
 ナオ蛤が口を開ければ腕に盛る 同
 前総裁の仲介は無駄 恭
 バグパイプ響くマーチの間延びして 斎
 きざす愁ひか城をめぐれば 彦
 若かりし君の笑顔の夏帽子 斎
 日灼の肌に爪を痛がる 彦
 入籍はプロダクシヨンの了解を 恭
 首位と二位とが負けを争ふ 寸
 原寸の手跡足跡石畳 恭
 うしろ淋しき禪定の僧 彦
 碁敵も今宵は共に月の客 寸
 とぐるを解いて穴に入る蛇 斎
 ナウ牧閉ざす母は小さなクルス下げ 恭
 五十路の謡鼓手習ひ 同
 短日の仕掛時計の馬歩む 寸
 しぼしひらひら包丁の閃 彦
 益荒男の薪をくべ足す花簪 斎
 四阿の椅子更けてあたたか 寸

平成二十二年八月二十八日 首尾
 於 横浜 大佛次郎記念館

連句を授業で 室房子さんインタビュー

アメリカのミネソタ州、ミネアポリスのコミュニティーカレッジで、ご担当の「日本文化体験」の授業に連句を取り入れておられる室房子さんにお話をうかがいました。

編集部 まず、コミュニティーカレッジについて教えてください。

室 二年制のカレッジで、日本で言えば短期大学に近いですが、高校と大学の間に挟まる柔軟な教育機関です。専門学校的な要素もありますし、授業料が割安なためもあり、ここで二年間の教養課程を履修し四年制大学の三年生に編入する生徒もいます。ミネソタでは、高校生でも、高校の授業に飽き足らない意欲的な人は、高校に通いながら大学に通って単位をとり、それを後で大学の卒業単位として活かすことができるシステムがあるので、高校生も受講しています。

アメリカでは高校まで教育費は無料なので、たとえば一年留年してでも、高校生のうちにこのカレッジでなるべく沢山の単位を取得しておいて、それを利用して授業料の高い大学は三年で卒業する、などという利用法もあります。また大学卒業後の人が何かをスポットで学ぶ社会人教育機関という側面も持っています。ですから学生の年齢、経験はさまざまです。

編 日本文化体験とはどういう授業ですか。
室 三単位の日本文化のクラスですが、二単位は講

義とりサーチ一単位が日本文化体験となっていてます。異文化について実際に何かやってみて、その経験や実感を通し講義で受けた知識の理解を深め、新しい角度から様々な文化を背景とする生徒自身の持つ文化を再認識する機会を与え、それを鏡として日本文化への理解をいっそう深める手懸かりにもする、といった狙いのワークショップ的授業です。私は昨年と今年の二回、一月末から五月初めまで、春のクラスで、日本文化体験のコースを担当しました。新学期は秋のクラスがあり八月末から始まります。

今年の春のクラスでは最初と最後に、六句構成の短い連句を各一卷作りました。最初は互いに打ち解けるためのツールになるし、最後は仕上げに何か完成したものを残すという意味があるでしょう。その間には、姿勢を正して硯で墨を摺り、筆で字を書くなど、日本文化についての他の体験を挟みます。

編 クラスの規模はどのくらいですか。

室 一クラス三十人を四〜五人ずつの座にわけて、それぞれの座で実作します。それだけの人数だと、中にもあまり乗ってこない学生が二〜三人いることもあります。あとは皆熱心に取り組んでくれます。時間にさほど余裕がないので六句構成の短い連句形式を考えました。

編 どんな形式ですか。

室 発句は挨拶、脇は返礼、第三で飛躍して四句目は軽く、など、表合せ六句と基本は同じ説明をしますが、季の扱いを多少変えています。発句は有季、脇も同季ですが、春と秋が他の季節に比べて特別という感覚は、自然としても文化伝統としてもアメリカにはないので、発句が春や秋でも同季は脇まで、第三は無季にします。五句目を月や花というふうにも決めませんが、新しい季節や、なにか際立った物事を出します。六句目の挙句は穏やかに納めま

す。
編 学生の反応はどうですか。どんなことに留意して教えておられますか。

室 ハイクはみな小学校教育のなかで経験しているので、連句も入りやすいようです。「ハイクモメント（俳句的瞬间、俳機、俳因）」ということを案外理解しています。ちよつとした発見や感動を言葉に定着させる、思い通りに表現できる言葉を探し、みつかったときの喜びとか。詩とか美というのは特殊で肩肘張った大袈裟なものではなくて、日常のさりげない事柄にも詩的な契機が含まれているし、誰でも詩の創作を楽しむことができる、そういう画期的なものとしてすでにハイクが普及しています。

連句ではさらに、個人の自我表現ではなく共同作業でも言語的な創作活動が成り立つ、そして深いコミュニケーション、相互理解が生まれるということに新鮮な驚きがあるようです。

日本文化を紹介と言われたとき、いったい何が日本文化なのか考えました。衣替え、食器、和菓子……衣食住すべてにおいて日常に季節感を持つて生活している事ではないかと思いました。俳句の説明にあたって日本の季語集を紹介しますが、そこで、ミネソタ季語集を作る事を提案しました。春夏秋冬ホリデーの五カテゴリーにわけ生徒に考えてもらいます。ミネソタなりの季節変化に注意を向けることで新たな季節に関する発見があり、俳句連句ともに身近なものとなり、また、日本文化を理解する助けになるのではと考えました。必ずしも季節的現象に限らず、ミネソタなりの月花とは何かを、これからも皆と考えるべきだと思います。

編 今年後半の授業が済んだら、「猫蓑通信」にぜひレポートのご寄稿をお願いします。
室 承知いたしました。（六月十三日）

連句ことばはじめ

高山鄭和

突然見知らぬ若い男が玄関に現れ、今晚泊めてくれと言い出した。短パンによれよれのTシャツ、学生風ではあるが真っ黒に日焼けしている。一枚の名刺が差し出され、そこには「歌枕巡り重なる旅枕」と書かれていた。

思い起こせば今から四十有余年前のことである。私が中学生のころから抱いて来た『夢』を実現しようと思いつき、松尾芭蕉が江戸時代に歩いた「奥の細道」を辿る徒歩旅行に出た。思えば学生気分そのままの、無謀な旅であった。

夏休みを十二分に活用し六十日間二千四百キロを踏破する計画。芭蕉の時代の道を忠実に歩き、出来ることなら奥の細道に描かれているように時には馬に跨り船に乗り、約半年のルンルンな準備を経て『夢Ⅱ旅』を実行に移した。

文庫本の「おくのほそ道」(含…曾良随行日記)と分厚い「全日本広域道路地図」だけを頼りに。もちろん親からは大反対をされ、友からは白い目で見られた。学生の気軽さから所持金はほんの僅か。最初から無銭旅行が前提であった。

冒頭のシーンは、その奥の細道を歩く旅の途次歩き疲れ陽も傾き始め心細くなってきたころ、その夜のねぐらを求めて目を着けた家の門を叩き、玄関で「今晚泊めてくれ」と出し抜けに不躰に頼み込んである場面を描いてみたものである。

もちろん、断られることもあったし、説教だけさ

れて追い返されることもあった。しかし多くの家々では突然の見ず知らずの若者を温かく迎え入れてくれ、夕飯、風呂、寝床、翌日の朝飯から昼の弁当までを快く提供してくれた。

この奥の細道の旅でお世話になった多くの方々やご家族とはその後も数十年にわたって、お手紙や再訪などでお付き合いさせて頂いている。まだまだ「良き日本」が至るところにころころと転がっていた時代の話である。

「はいく」に出会ったのが小学五年、江戸という時代に興味を示し、国語の勉強の中でちよつとだけ芭蕉に親しんだ中学生。高校時代には先生から受験に有利と言われた世界史を選択、未だに日本史オンチでいる。

こんな心寂しい個人史ではあるが、何時のころからか「俳諧」という江戸時代の遊びに引かれるものがあった。芭蕉の生きた時代を知りたいと思い、日本に生まれたこの座の文芸というものの本質を見つけてようとした。

ビジネスの世界でわき目も振らず走り続けて四十年後、いざ自分が定年という人生の節目を迎えるにあたって考えた。さあ第二の人生何をしようかと。その時幸いにも、我が『連句』にたどり着いたのである。

本格的に連句のスタートを切ったのは昨年の初め。現在猫藪会ピカピカの一年生である。幸いにも多くの先輩にお目にかかることが出来、ご指導・ご鞭撻を賜り先念に採んで戴く機会を得、連句が面白くなり始めたところである。

もちろんまだまだ採まれ方は十分でなく、柔軟な頭脳と自在な作りは遠く先輩方に及ばず、もう少し自分の脳みその柔らかいうちに連句を始めておけ

ばよかったという取り返せない悩みを抱きながらも、座の末席を汚し連句に励んでいる。

多くのリーダーがおいでになる、横浜在住というのも幸いであった。現在六つの月例の座に参加させて頂き、連句を楽しませて貰っている。他に会社の元同僚にも声を掛け、連句の輪を広げる努力も少しずつ。

ひよつ子のくせして僭越な発言ではあるが、今自分は「連句」の世界をもっと広げるにはどうしたら良いのだろうかと考え始めている。自分の経験から初心者用に簡単な入門書があったらとも思う。正直連句は入り口が取っ付きにくい。

連句を詳説する本は数多あるが、なかなか初心者入門の読み物が見つからない。もつと多くの人たちに連句の面白さを知ってもらうためにも、初心者がスムーズにそこに入り込めるガイドブックがあったら良いなと考えている。

まだまだ私自身が連句よちよち歩きのステージにて、片腹痛いのご批判もごもつとも。が、日本人には連句を文化として広く受け入れるベースが十分に備わっていると確信する。その一助となる工夫をぜひ追求してみたい。

連句の「座」の面白さはコントラクト・ブリッジ或いはテニスのダブルスに近いと聞いたことがある。私は両方とも未経験で多くを語ることは出来ないが、世界には同様の楽しみを追う人たちも多いものと考え。

共有できる文化的基盤があるかどうかについて自身は未だ何も知らないが、ひよつとしたら連句は世界的な裾野を持つことが出来るのではとも考える。いろいろな国の人達と連句を楽しむこともこれからの夢として温めておきたい。

● 第百十七回猫養例会が開催されました

四月二十一日（木曜日）、亀戸天神社にて正式俳諧奉納の後、第百十七回猫養例会が開催され、九卓に分れて二十韻を巻きました。作品は今号三ページ以下に掲載しています。作品はすべて、懐紙に清書の上、五月十七日に亀戸天神社に奉納しました。

● 第二十一回猫養同人会総会が開催されました

六月十九日（日曜日）、新宿ワシントンホテル新館にて第二十回猫養同人会総会が開催され、議事後、八卓に分れて歌仙を巻きました。作品は次号に掲載予定です。

● 今後の予定

・平成二十三年度猫養会総会（第百十八回例会）

七月二十日（水曜日）

十一時～十七時（受付十時半より）

於 江東区芭蕉記念館

・正式俳諧稽古

九月二十一日（水曜日）

於 江東区芭蕉記念館

・俳諧芭蕉忌・明雅忌

十月十九日（水曜日）

於 江東区芭蕉記念館

● 猫養基金にご協力ありがとうございます

・匿名 平成二十三年一月 一万円

・浅野黍穂様 平成二十三年二月 一万円

・源心庵の会様 平成二十三年四月 二万円

・山寺たつみ様 平成二十三年四月 五千円

・匿名 平成二十三年四月 五千円

・篠原達子様 平成二十三年五月 一万円

・神楽坂連句会 平成二十三年六月 二万円

基金口座 みずほ銀行新宿新都心支店

猫養基金 普通預金 3376045

● 作品集・書籍など

・四宮連句会作品集第八巻「夏始」

五月十五日刊 お問い合わせは式田恭子まで。

● 受賞

・第十五回えひめ俵口連句全国大会

松山市文化協会会長賞

歌仙「頬打つ雪」の巻 野口明子 捌

同 十五周年記念大会特別賞

歌仙「千年の」の巻 倉本路子 捌

同 俵口賞

歌仙「行合の」の巻 鈴木了齋 捌

● 新会員

・松澤美鈴 千葉県八千代市在住

・島崎市誠 東京都葛飾区在住

● 新同人

・長坂節子 ・間瀬美美 ・武井敦子 ・野口明子

● 同人会次回当番

・佐々木有子 ・横井土郎

● 猫養例会二十三年度当番（十月芭蕉忌より）

・長坂節子 ・間瀬美美 ・武井敦子 ・野口明子

● 改姓

・北爪 瞳（旧姓古藤）

● 転居

・森明子 東京都新宿区内転居（電話変わらず）

● 訂正

・前号（第八十三号）

二ページ下段 ナオ三句目

誤「モバゲー両面」↓正「モバゲー画面」

十ページ上段 後ろから三行目

同下段 後ろから九行目

誤「坂本小学校」↓正「阪本小学校」

● 猫養会オフィシャルサイトをご利用下さい

<http://nekonino.coilne.jp/>

サイト内の「書庫」のページで、『猫養通信』の全バックナンバー、『季刊連句』全バックナンバーなど、猫養会関連資料を閲覧、ダウンロードすることができます。

季刊 「猫養通信」第八十四号

平成二十三年七月十五日発行

猫養会刊

発行人 青木秀樹

〒182-0003

東京都調布市若葉町2-21-16

編集人 鈴木了齋

印刷 印刷クリエイト株式会社